O2-029

「こどものケガを減らすためにみんなをつなぐプラットフォーム Safe Kids」の構築

太田 由紀枝[1]、大野 美喜子[2]、西田 佳史[3]、北村 光司[2]、山中 龍宏[4]

[1] NPO 法人 Safe Kids Japan
[2] 国立研究開発法人 産業技術総合研究所、NPO 法人 Safe Kids Japan
[3] 東京工業大学工学院、NPO 法人 Safe Kids Japan
[4] 緑園こどもクリニック、国立研究開発法人 産業技術総合研究所、NPO 法人 Safe Kids Japan

【はじめに】
事故によるこどもの傷害は多発している。日本スポーツ振興センターの災害共済給付のデータや、東京消防庁の日常生活事故の救急搬送数を見ると、毎年ほぼ同じ数値が並んでおり、傷害対策が十分に機能していないことがわかる。傷害を予防するには、消費者からの情報を収集・整理して事業者や行政に伝え、こどもを取り巻く製品や環境を整備する必要があるが、「こどもの傷害を予防する」ことを目的とした消費者と事業者・行政をつなぐコミュニケーション・ツールはほとんどなかった。そこで、傷害予防のための新しいプラットフォームを構築することにした。
URL：https://www.safekidsninja.com

【経緯】
東京都生活文化スポーツ局消費生活部では「東京都商品等安全対策協議会」を設置している。この協議会は、商品の使用又はサービスの利用に伴う危害を防止し、都民の安全な消費生活の確保を目的として、消費者及び事業者、学識経験者等が商品やサービスの安全性について検討を行う協議会であり、毎年テーマを決めて検討が行われている。令和 4 年度は「こどもの安全のためのプラットフォーム」がテーマとして取り上げられ、東京都と民間団体である NPO 法人 Safe Kids Japan が協働してプラットフォームを構築することとなった。本協議会は 3 回開催され、本プラットフォーム構築について検討を重ね、2023 年 2 月 16 日に公開した。

【プラットフォームの目的と活用】
このプラットフォームでは、こどものケガを減らすことを目的として、以下のようなさまざまな活用法を期待している。
■消費者の声を聞いて企業や行政につなぎ、企業や行政が製品や環境、法律等を変える。
■消費者が、安全性の高い製品や傷害の発生を減らすことが期待される製品に関する情報を本プラットフォームで入手し、それらの製品を購入して使用する。
■消費者が実践している安全対策を SNS 上で共有し、その対策を他の消費者や企業等が参照する。
■本プラットフォームに掲載された傷害予防に関する情報を、医療者・保育者・研究者等が参照し、研究や実践に活用する。

【今後の課題】
こどものケガを減らすために、消費者・行政・企業相互で情報共有や交流ができるプラットフォームが稼働し始めた。今後はこのプラットフォームおよび関連する SNS を通した活動の効果を検証していく必要がある。

O2-030

「ニューボーンフォト」の現状と問題点

山中 龍宏[1]、太田 由紀枝[2]、大野 美喜子[3]、北村 光司[3]、西田 佳史[4]

[1] 緑園こどもクリニック、国立研究開発法人 産業技術総合研究所、NPO 法人 Safe Kids Japan
[2] NPO 法人 Safe Kids Japan
[3] 国立研究開発法人 産業技術総合研究所、NPO 法人 Safe Kids Japan
[4] 東京工業大学工学院、NPO 法人 Safe Kids Japan

【はじめに】
育児に関しては、次々に新しい「もの」や「こと」が提案されている。現在は、こどもが生まれると、保護者はスマートフォンで頻回にこどもの写真を撮るようになる。最近では、「ニューボーンフォト」と呼ばれる撮影のジャンルがある。これは乳児期の初期に撮る写真のことであるが、乳児が自発的にとった姿態だけを撮影するのではなく、大人がこどもの「かわいらしさを演出する」ために撮る写真で、時には、乳児に無理な姿態をとらせて撮影している場合がある。一部の人からは、その危険性が指摘されている。そこで、ニューボーンフォトの実態を調査してみることにした。

【対象と方法】
株式会社ベネッセコーポレーションが運営する子育て支援サイト「たまひよ」会員を対象に、2022 年 12 月 9 日～ 13 日の 4 日間、インターネット上でアンケートを行った。調査項目は、現在の子どもの月齢、ニューボーンフォトの認知度、撮影経験の有無、場所や撮影者、撮影時の様子、乳児への負担、安全性などであり、さらに「ニューボーンフォト」について、自由に記載してもらった。

【結果】
回答者数は 2,412 人で、ニューボーンフォトを「知っていた人」は 1,947 人（80.7%）、「知っていた人」と「聞いたことがある人」の合計 2183 人のうち、ニューボーンフォトの経験がある人は 581 人（26.6%）であった。ニューボーンフォトの安全性について尋ねたところ、撮影を経験した人は「特に危険なことはなかったので安全性について気になることはない」と回答した人が 385 人と約 66% であった。一方、撮影を経験していない人は「安全性を疑問視する声があるのなら撮影はしない」と回答した人が 727 人、「安全性に問題があれば国や学会などがその旨を発表するはずだが、今のところそのような発表はないので問題ないのだと思う」、「多くの人が撮影をしていて問題がないのだから、大丈夫だと思う」と回答した人が合わせて 868 人と、二分された。

【考察】
乳幼児をもつ保護者の多くはニューボーンフォトについて知っており、中には実際に撮影をしたことがあると答えた保護者は 27%もいた。現時点では、乳児に無理な姿態をとらせることによってケガをした事例の報告はみあたらないが、大人の考えで乳児が自らとることのない姿態をとらせて撮影することは望ましいことではないと考えた。

Presented by Medical*Online